

教育長賞の選評

境 小 学 校 六年 原口 晴太 「桜の木 鉄道あと地に 春告げる」

廃止駅にも、桜は今年も咲いているという情景を詠ったものです。漢詩に「年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず」という人の世は変化するが、自然は変わらないという私たちの世の中のはかなさを詠ったものがありますが、それに似た静かな雰囲気のでた句です。ただ、小学生の句にしては、少し大人びているという感じはします。

垂水中央中学校 三年 中園 理子 「鬼灯に 誘われ歩く 細い道」

田圃のあぜ道か、そういったところにあちらこちらと鬼灯が植えてあり、その不思議な美しさに惹かれて歩いたという情景です。おそらく赤く熟していたことでしょう。「鬼灯（ほおずき）」という字面からも、何か神秘的なものに誘われる感じがよく出ています。

垂水高等学校 一年 梶 あすか 「朝日うけ 海拓きゆく フェリーかな」

爽快な感じの句です。明るく輝く朝日の中を、フェリーの水脈（みお）がまるで海を二つに分けて行くように進んでいるという情景です。俳句は、言葉で美しさを表現する言語芸術ですから、どういう言葉を選ぶかで善し悪しがまぎります。その点で「海拓きゆく」という表現が一句を引き立てています。

講評及び今後に向けての指導

【小学校】 俳句は、見たり、感じたりした情景を自分だけの言葉で表現しなければなりません。その意味で垂水のカンパチや温泉水、銀杏などを詠ってはいけないということではなく、それにどういう表現を与えるかということが大事です。観光案内に書いてあるような表現では俳句になりません。木場沙羽さんの「散歩道 家族で聞いた 虫の声」は家族でというところが、下津江里亜さんの「ぼくイルカ きんこうわんを ゆったりと」は、イルカへの自己投影が、原口晴太さんの「棒踊り 衣装がきれいに 空を舞う」は、衣装が空を舞うというところが、下津奈緒さんの「いちよう舞い 木立にもれる 月明かり」は、落ち葉と月明かりの組み合わせが、それぞれ自分の表現になっています。

【中学校】 中学生は、そろそろ大きく言えば自分の人生について、具体的には進路などを考える時期だと思いますが、そのような悩みや不安、または希望などを詠ったものが少なく、大部分が自然詩でした。宮城律乃さんの「どこまでも 遠く広がる いわし雲」は、秋になって天高く、空が広がっていく感じを、いわし雲の広がりで表現しています。中島駿汰さんの「早朝に 光を浴びて 香る稲」と小平蘭丸さんの「霜降りし 朝の稲穂が 光る束」はどちらも稲穂が素材になっていますが、朝日の中で香るという表現や、霜で光るという表現が、稲穂の美しさをよく表しています。

【高等学校】 吉留雪月愛さんの「風吹けば 日に照らさるる 灰の舞」は、嫌われ者の降灰を「灰の舞」と美しく表現しました。永野明香さんの「あざやかな あじさい濡らす 梅雨の雨」は、一般的に雨はせつかく咲いた花を腐らせてしまうと嫌われますが、アジサイについてはかえって生き生きとさせると逆転したところが、美しい句になっています。自然現象に対しても自分独自の見方や感じ方と、やはり個性的な表現が大事です。川尻祐斗さんの「見守るは 出会いと別れ サクラの木」と、西真鈴さんの「風にのり ほのかに香る 潮の匂い」は、現象に対する感受はよいのですが、表現に一工夫欲しいと感じました。